

### 能動的学習テーマに

#### 帝京大がFDフォーラム

帝京大学高等教育開発センターは、七月二十一日、米国においてFD研究・実践の第一人者である元PODネットワーク会長L.ティ・フィンク博士を講師に迎え、第一回FDフォーラムを八王子キャンパスにおいて開催した。

講演では、「能動的学習」を学生に学習させるには「ラーニング」をテーマに、教員



フィンク博士

が学生を授業に関与させ、意欲的な学びへと動機づける実践方法がわかりやすく説明された。参加者は八〇名で、同大学

や他大学からの学生の姿も見られた。

講演後のアンケートには、「学生を主体とした授業の構築は目指しているものではないが、いのかからないことが多いですが、非常に素晴らしい教えを頂きました。」など、好意的な意見が多かった。

ティ・チンクからラーニングへのパラダイムシフトの重要性について、学生のラーニングの視点から授業を振り返ることを見えなかったものが見えてくる。学生は当該教員からだけでなく、他の教員や学生など、様々な経験から幅広く学んでいる。ティ・チンク・パラダイムにもとづく授業改善は、その手段に過ぎない。すなわち、学生の「意義ある学習」を生み出すラーニング・パラダイムにもとづく授業改善でなければならない。ノーベル物理学賞受賞者の

米国のカール・ワイマン博士は、二〇一一年五月『サイエンス』誌で論文を発表した。物理学を学ぶ学生三五〇人の二つの大きなクラスで、一人の教員が数週間、同じ講義を行った後、一方のクラスでは最後の二週間の三日間を大学院生が能動的学習を取り入れ、グループ学習やフィードバックを行った。能動的学習を取り入れたクラスでは、学生の出席率は五七％から七五％に、授業への関与率も四五％から八五％に伸びた。数量的な増加だけでなく、学生の成績も伸びた。講義だけの学

生と実験的に能動的学習を取り入れた学生との間に大きな変化が見られたという。これは、能動的学習が学生の学びを改善することを証明する画期的な研究である。フィンク博士は、学習者中心の視点を教授法に取り入れ、学生がとれただけ学んだかに視点を移せば、授業への出席率や関与率も伸びると結んだ。

最後に、沖水佳史理事長・学長より能動的学習の意義と大学人として教えることの重要性が説明され、フィンク博士と参加者に感謝の意が述べられた。詳細については、

URL <http://apps.main.teikyo-u.ac.jp/~ctl/>を参照。